

# ある軍医の日清戦争体験と対清国観

—渡辺重綱『征清紀行』を読む—

大 谷 正

はじめに

筆者はかつて、明治期に東北仙台で発行されていた地方紙、『東北新聞』と『奥羽日日新聞』の日清戦争期の部分を調査し、この調査をもとに町田市立自由民権資料館で、「戦争・戦地の情報と地域の民衆」と題する講演をおこなったことがある。この講演の記録は、『町田市立自由民権資料館紀要』12号（1999年3月）に掲載され、これに加筆修正したものを、檜山幸夫編『近代日本の形成と日清戦争—戦争の社会史』（雄山閣、2001年）に収録した。その後しばらく、この仕事を放置していたが、追加調査をおこなって、このほど『兵士と軍夫の日清戦争』（仮題、有志舎より近刊予定）という本にまとめた。この本は、新聞に掲載された兵士と軍夫の戦場からの手紙に特に注目しながら、地域の新聞を丸ごと愚直に読み、それによって、この地域の人々（出征した兵士と彼らを送り出した地域の人々）が日清戦争をどのように体験したのか、そして戦争の経過とともに地域と人々にどのような変化が生じたのか、を明らかにしようとしたものである。

東北地方の郷土部隊は第2師団である。この師団は、1894年10月末に仙台から出征し、広島に滞在した後、1895年1月末から2月の山東作戦の主力部隊となり、ついで遼東半島に滞在して、日清講和条約の調印・批准ともなって帰国する予定であった。ところが台湾受領に向かった近衛師団が、台湾民主国、ついでその崩壊後も抗日義勇軍の抵抗にあって立ち

往生したので、これを援護するため台湾に向かった。そこで抗日義勇軍との戦闘（ゲリラ戦と討伐焦土作戦）と悪疫流行のため、多くの兵士と軍夫が死亡した。結果的に全師団のなかで最も長く海外に滞在し、かつ最大の被害を出した師団になったのである。

新聞紙面に掲載された初期の山東や遼東からの手紙を読むと、清国と清国人に対するステレオタイプな差別・蔑視観が形成されていることが分かった。しかし冷静に考えると、明治中期の東北農村出身の多くの兵士達にとって、故郷の生活と清国の生活の間に、文化と生活習慣の違いはあっても、質的な大差があったとも思えない。110年前の日本も中国も、現在の生活と比較すれば、同じように不潔・不健康であった。

にもかかわらず型にはまった差別・蔑視表現が手紙に書かれた理由としてつぎのようなことが考えられる。出征から間もない山東作戦の時期は、意外にも連戦連勝で士気が高揚し、それとともに早期帰国の期待が膨らんでいた。戦闘が一段落すると兵士たちは、故郷の人々に自分の無事を知らせる手紙を送り、誰もが望んでいた早期帰国の可能性を匂わせた。兵士たちは中国に対する十分な知識・体験がないにもかかわらず、そこには他人が使っていたり、新聞で読んだような、ステレオタイプな中国観が安易に援用されているように見える。これに対して、長期の戦場体験の後にたどり着いた苛酷な台湾の戦場からの手紙には、豊かな農村、疫病の猖獗、勇敢な抗日義勇軍に対して、差別・蔑視と感嘆・賞賛が入り交じった複雑な評価が見られた。自分の目で見て体験した、具体的で様々な台湾認識が見られ、絶望や厭戦の言葉も見られた。

拙著を書くなかで、戦場からの手紙には意外に多様な清国観・台湾観が見られることに気がついた。しかし、戦争が終わった後に人々の記憶に残ったのは、山東や遼東からの初期の手紙に見られるような、単純で一面的な中国蔑視観であった。

日本人が日清戦争を体験したことが、中国とそこに住む人々に対する蔑

視観を確立させることに直接つながるといふ、単純な見方は不十分である。戦場体験だけに限らず、戦争の過程で政府・民党・ジャーナリズムが唱えた戦争に関する様々な言説、そしてそれらが人々に伝達されるメディアの特性と環境を重層的に考える必要がある。

政治やジャーナリズムの世界では、開戦前には清国の実力を脅威と視るものが多かった。開戦後日本軍が海陸で連戦連勝すると、その反動からか、清国弱しという侮蔑論、清国分割に乗り出せという極端な議論が噴出した。一方で複雑な国際関係に目配りをせよ、あるいは清国を破ったこの時こそ日清同盟実現の好機という主張も根強かった。そしてすでに述べたように、戦場からの手紙には多様な清国観・台湾観が見られた。

にもかかわらず、定型的で一面的な清国蔑視観が定着した原因としては、マスメディアはしばしば単純なメッセージを選択する傾向があり、そしてマスコミの発する単純なメッセージを受け取った人々は、支配的な言説に合わせるように自己の記憶や認識を整序し直すからではないか、と考える見る視点が必要だろう。そして、この時成立した単純かつ一面的な清国蔑視観は、その後の日本の対中国政策を規定する一要因となった。

本稿の目的は、すべての従軍者が一面的な清国蔑視観をもった訳ではなく、日清戦争時には多様な清国観が存在したという証拠を示すことである。そのための史料として、後備歩兵第3連隊（仙台）に所属して遼東半島警備に赴いた渡辺重綱軍医が、帰国後出版して知友に配布した和歌を詠み込んだ擬古文体の歌日記『征清紀行』（白関書屋、1896年）を取りあげる。

少年時代から漢籍に親しみ、詩を賦すことを何よりの趣味とした60歳の軍医は、清国に対する優越感や差別感をほとんど持たず、本で得た中国に関する知識を現地で確かめることに熱中した。擬古文というメディアの特性であろうか、生きて帰りたいと泣く兵士を慰め、治療した清国の負傷兵と筆談して共感し、戦禍のために困窮する農民に同情して「諺に七年の凶歉に逢ふも、一年の軍に逢ふなかれとは能くも云ひたり」と記した（た

とえ7年間の飢饉がつづいて飢えようとも、1年間の戦争に遭遇するよりましである、ということわざ。日本中世史研究者の藤木久志は、日本中世の戦争が、略奪強姦のみならず、若い女性や子供の奴隷化まで伴った過酷なものであったことを説明する際、このことわざを引いて説明した。そして日本的戦争慣習は、戊辰・西南戦争でも見られたことも指摘している。藤木『飢餓と戦争の戦国を行く』朝日新聞、2001年参照)。

本稿は渡辺の言説と彼のような人が存在した理由を、彼の残した著書を読むことで考えたいと思う。渡辺はプロの著述家ではないが、つぎのような詩と和歌を読みこんだ紀行文と漢詩集を残し、これらは宮城県図書館、仙台市立図書館、国会図書館に所蔵されている。このなかで和歌を読みこんだ歌日記は『征清紀行』だけである。

『琉球漫録』(1879年、日本文の紀行文と漢詩)

『漫遊詩草』(仙台徳泉堂、1893年、漢文と漢詩)

『征清紀行』(仙台白関書屋、1896年、擬古文の紀行文と和歌)

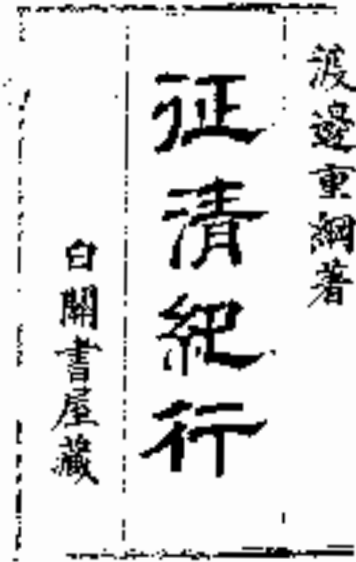
『退老余韻』(渡辺の遺稿集私家版、1909年、漢文と漢詩)

このほかに、『七十漫語』と題する著書があったらしいが、上記の図書館に所蔵されておらず、今後の調査が必要である。

本稿は、第1章で『征清紀行』を読んで、彼の戦争体験と対清国観を明らかにする。つづいて第2章で、『漫遊詩草』と彼の死後出版された遺稿集『退老余韻』の2冊の漢詩集を読んで彼の生涯を明らかにし、彼の清国認識が生まれた背景を考える。普通の論文とは第1章と第2章の順番が逆になるのは、その方が謎解きのように面白いと考えたからである。

なお、渡辺の著書で一番有名で、今でも諸書に引用されるのは『琉球漫録』である。同書は1879年に強行された琉球処分直前の、1877年の年末から1878年夏までの半年間を、沖縄兵営で勤務した際の見聞録で、この本は目を通しただけで、本稿の史料としてほとんど使っていない。

白 關 重 邊 綱 像



『征清紀行』(1896年)表紙



渡邊重綱晩年の肖像写真(『退老余韻』口絵より)

## 1 『征清紀行』の世界

### 1) 渡邊重綱の日清戦争従軍経験と『征清紀行』の成立事情

渡辺の日清戦争従軍経験を確認するために、最初に『征清紀行』から作成した年表を掲げることにする(表1)。

表1 渡邊重綱の日清戦争従軍年表

1894年

9月25日、第一充員令発令、「我本年六十才に至るも猶後備年限中なるをもって召集令を辱なふす。」、同日午後3時躑躅ヶ岡歩兵第4連隊兵舎に出頭、歩兵第4連隊補充大隊医官を命ぜられる。

10月6日、後備軍召集令。27日、後備歩兵第3連隊第1大隊付を命ぜられる。連隊長は友田美喬大佐、大隊長は井上享少佐。

12月4日、後備歩兵第3連隊は仙台停車場より出発、第1軍に属し朝鮮国を経て清国に発向すべき命を受ける、総計1,697名。

12月7日、広島着。8日、午前大本営野戦衛生長官部に出現、石黒總監、落合軍医正に面謁、落合に老齡の故に酷寒中の出征を止めて、広島に留まるよう勸告されるが、これを断る。

12月9日、後備歩兵第3連隊は天皇から連隊旗を賜る。

12月10日、宇品より鹿児島丸に乗船。11日、抜錨。21日、大同江河口魚隠洞より5里上流の緑沙浦に上陸。

12月23日、平壤着。25日、平壤発、義州に向かう。

### 1895年

1月3日、後備歩兵第3連隊本部のある義州着、第1大隊第4中隊（中隊長心得藤井幸植中尉）に属し清国盛京省大東溝守備隊勤務を命ぜらる。

1月4日、義州発、鴨緑江をわたり、清国領安東県をへて、6日、大東溝着。

1月7日、第4中隊は前守備隊第3師団歩兵第18連隊と交代。

1月22日、第4中隊は土城子守備を命ぜられる。

1月23日、大東溝発、途中龍王廟を経て、25日、土城子着。

3月17日、仙台の妻より書簡2通はじめて届く、翌日返書に和歌2首を添えて送る。

3月27日、第1大隊本部（岫巖）勤務を命ぜられる。28日、土城子発。29日、岫巖着。

4月1日、患者集合所を後備歩兵第3連隊第1大隊医務室とする。この間、避病院を岫巖郊外の松雲寺の正殿に置く。

6月9日、第2師団歩兵第16連隊第3大隊の一部到着。10日、守備隊勤務交代。

6月12日、營口にある後備歩兵第3連隊第1大隊第1・第2中隊を除き、後備歩兵第3連隊は大孤山に集合の上、帰朝を待つべしとの命令あり。

6月16日、設宿・衛生施行のため斎藤中尉と先発を命じられ、岫巖発。17日、大孤山着。

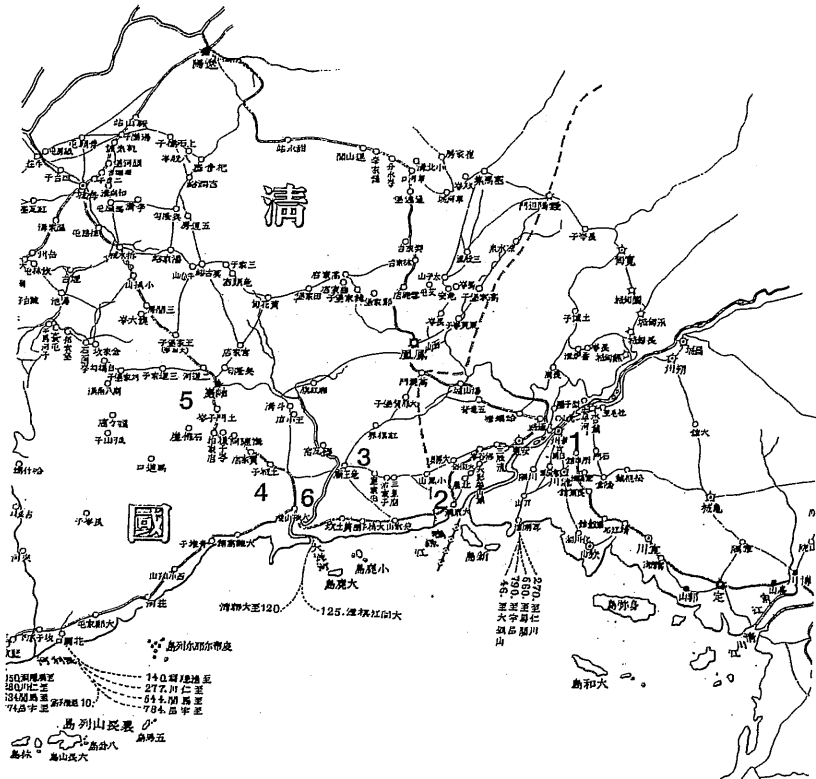
6月24日、岫巖にコレラ発病の報あり。29日、第1大隊輜重輪卒がコレラに罹る。

7月には連日患者発生、10日までに患者40余名に及び、死者20余名に達す。

7月15日、連隊本部第1大隊本部と第3第4中隊に乗船命令。16日、抜錨。17日、18日両日に重症7名、軽症8名発生。

7月19日、赤間関着、彦島検疫所に患者15名を托す。彦島から大阪間で7名の患者発生。

図1 渡辺重綱『征清紀行』関係図



1. 義州，後備歩兵第3連隊本部所在地
2. 大東溝，渡辺の最初の勤務地，後備歩兵第3連隊第1大隊第4中隊駐屯地
3. 龍王廟
4. 土城子，渡辺の2番目の勤務地
5. 岫巖，渡辺の3番目の勤務地，後備歩兵第3連隊第1大隊本部所在地
6. 大孤山，後備歩兵第3連隊の帰国集結地

7月21日，大阪桜島上陸。

7月22日，午後3時半梅田発，24日午前11時5分仙台着。

渡辺は1887年2月7日付で，病気のために仙台鎮台付軍医を休職することを余儀なくされ，1889年退職して予備役に入ったので（第2章参照），

このため60歳にもかかわらず、7年後の1894年に日清戦争が勃発すると9月25日の第2師団第一充員令とともに召集された。しかし、さすがに60歳の軍医を第一線の戦闘に参加させる訳にもいかず、つづいて占領地警備のための後備軍が召集されると、後備歩兵第3連隊第1大隊付の勤務に配置換えされた。

後備歩兵第3連隊は12月4日に仙台を発ち、7日広島着、渡辺は翌日8日に大本営野戦衛生長官部に出頭して、石黒総監と落合軍医正に面会した。落合が老年者ゆえ酷寒中の出征は覚束ないので、広島に留まるよう勧めると、渡辺はそれを拒否した。歌日記なので、本のなかでは拒絶の返事が次のような和歌になっている。

諸人と同じあゆみはならずとも国にむくゆる心おくれし

この後、渡辺は9日に連隊旗授与式に参加し、10日には宇品より鹿児島丸に乗船、11日抜錨、途中風雨を鳥影に避けて、16日大同江河口の魚隠洞に入港、21日魚隠洞より5里上流の緑沙甫に上陸している。宇品から朝鮮上陸まで10日もかかったのは、悪天候と多数の船が大同江河口に停留していたためではないかと想像される。後備歩兵連隊所属にもかかわらず、渡辺は本隊の第2師団より先に戦地入りしたのである。上陸後、彼は馬に跨って、後備歩兵第3連隊本部が置かれた清国との国境の町義州を目指して進んだ。義州到着は翌年1895年1月3日で、10日余りの行程であった。

ここで、第1大隊第4中隊（中隊長心得藤井中尉）に属して、盛京省大東溝守備隊勤務を命ぜられ、1月6日大東溝に到着した。大東溝は鴨緑江河口の清国側にある港である。第3師団歩兵第18連隊（豊橋）に代わって、1月7日から第4中隊は大東溝の守備についた。この後、第1、第3、第5の3個師団が参加した日清戦争最大の作戦、牛莊、營口、田庄台を攻略して、遼河平原の清国軍を追い払う作戦がはじまった。これにともなって後備第3連隊の守備範囲が拡大したので、第4中隊も大東溝西方の土城



子に進出するよう命じられ、2月25日土城子に到着した。ついで渡辺は後備第3連隊第1大隊本部勤務に配置換えされ、3月29日第1大隊本部の置かれた岫巖に到着し、ここで帰国まで勤務した。

つまり、渡辺は船便で大同江河口に上陸した後、陸路で朝鮮北部を横切って清国入りし、大東溝・土城子・岫巖に滞在し、6月中旬帰国命令を受けると大孤山に移動して、7月乗船、大阪に上陸して、そこから汽車で仙台に帰還した。1894年12月4日に仙台を発ち、1895年7月24日に仙台に帰ったので、7ヶ月間余の出征であった。占領地警備担当で、戦闘には参加しなかったものの、酷寒の地に出征し、帰国の過程ではコレラの流行で多くの犠牲者が出た。決して楽な出征ではなかった。

しかも、後備兵の悲劇はこれでは終わらなかった。仙台に帰ってきた、後備歩兵第3連隊、同第4連隊、同第7大隊は帰途隊内でコレラが発生したので、市内の兵営と寺院に隔離された。そして、後備歩兵第3連隊を解散して後備歩兵第5大隊に、後備歩兵第4連隊と同第7大隊は合併して後備歩兵第4連隊に、それぞれ改編されて、ふたたび台湾に派遣され。この過程で、第2師団管内の後備諸隊からは、死者595人、服役免除17人という甚大な被害が生じた。戦闘を目的としない後備部隊からこのような甚大な被害が出た例は、日清戦争では他に類例がない。ただし、渡辺は年齢のこともあったのであろう、台湾への出征には参加せず、帰国とともに徴兵を免除されたようである。

以上で、渡辺軍医の戦場体験の概略を示したので、つぎに彼が何故歌日記の形で従軍記録を残したのかを考える。

渡辺が好んだのは中国の漢詩であった。これ以前に出版した『琉球漫録』と『漫遊詩草』でも、掲載されたのはすべて漢詩である。日清戦争従軍記に和歌を選んだ理由を、彼は『征清紀行』の「著者緒言」につきのように記している。自分は幼少より詩を好み、諸先生に学んだが、「熟考すれば詩は元来支那の雅言にして、我国には和歌なるものあり。今や征清の日、

敵国の風を学ふも不祥なりとをもひ、最初征清軍の戦勝や諸友人の出征を送るとて拙なきこしをれを読みしなり」というのである。好きな漢詩を封印して、日本古来の和歌を採用することは、ナショナルな感情の高揚ともとれる。しかし渡辺にあっては、これは狂信的な中国排斥を意味するものではなかった。普段と違うジャンルに挑戦しようという、ある意味での遊び心の面が強かったようだ。そして、単なる和歌が歌日記に発展するのは、彼が召集されて、清国へ出征すると、「他国の事なれば眼に視、耳に聴くもの皆めつらしく、殊に戦場の景況なれば中々筆に尽しかたく、去りなから老の身なれば万事忘れ易く、一朝帰国の日諸友人に訪問せらるるまにまに、答のたすけにせはやと筆をとりてものしぬ」（『征清紀行』著者緒言）とあるので、帰国後諸友に体験を説明するための忘備録であった。

とは言え、最初から文学的な歌日記として書いたのではないらしい。第4中隊の大東溝における守備隊勤務がはじまった1895年1月7日の日記に、「海山かけて数日の行軍種々の事見聞せり、または此後の事ともを書記して友人にしらせんと、つたなき筆を起こしぬ。外国の海の面や山の辺をふるさとの人につけしらせなん」とあるから、清国での守備隊勤務がはじまって時間的余裕ができた頃から、意識的に異国の戦場体験を書き記す意欲が湧いたようである。以前から旅に出た際に日記を付けることは、渡辺にとって自然なことで、それは他人に見せることを意識した日記であった。日清戦争以前に出版した『琉球漫録』と『漫遊詩草』も、詩と旅日記のコラボレーションであった。

出征した渡辺は、何通もの手紙を『東北新聞』に寄せている。1894年12月12日掲載「後備三連隊の消息」は仙台から広島への移動を、同月28日掲載の「渡辺軍医の消息」は宇品から大同江河口魚隠洞までの船旅を描き、1895年2月13日の「渡辺軍医の従軍歌」は平壤から清国安東県までの旅程で詠んだ和歌を連らねている。同年4月10日から12日まで3回連載した「従軍記事抄、清国盛京省土城子に於て」は、『征清紀行』（全10

章)の第5章の一部と第6章である。もちろん本にする際、加筆修正がされている。

渡辺が歌を詠み、日記を付けていることは清国滞陣中から有名だったようである。帰国直前大孤山に滞在中、巡回に訪れた佐久間左馬太占領地総督(前第2師団長)は、「老人相変らず健康賀すへし、且又征清の詠歌数首新聞紙上にて見るに頗る雅致にして軍中の逸与なり」、と仙台で旧知の渡辺に語りかけた。仙台から送られてくる『東北新聞』を戦地で佐久間も読んでいたのである。また、3月26日、かつて仙台の詩文仲間だった熊沢安定大尉は、鳳凰城から海城への移動の途次、土城子の渡辺を訪ね、和歌ではなく、互いに詩を賦して胸襟を開くべしと議論を吹っかけた。渡辺は喜んでこの挑戦を受け、上戸の彼は酒杯を傾けながら、下戸の熊沢は茶菓を貪りながら、詩を応酬して、語り合った。

以上のような経緯で『征清紀行』が成立した。表紙には、「渡辺重綱著 征清紀行 白関書屋蔵」とあり、著者緒言と「不二の舎あるし雲外」の署名のある序文、目次とつづき、本文は126頁、文末に「雨香園主人成三」の跋文がついている。「成三」とは後出の鈴木省三のことである。奥付には、つぎのようなデータが印刷されている。販売される通常の本のような体裁であるが、実際は知人に配る私家版に近いかもしれない。

明治廿九年二月二日印刷、明治廿九年二月八日発行、定価金拾貳銭

著述人 宮城県平民渡辺重綱 仙台市東一番丁四十四番地

発行人 宮城県平民橋本忠次郎 仙台市定禅寺櫓十五番地

印刷人 宮城県士族江馬耕太郎 仙台市国分町六十一番地

売捌所 宮城県平民伊勢安右衛門 仙台市国分町百十四番地

つづいて、『征清紀行』を、仙台を出征してから清国安東県に到着するまで(第1章第2節)、大東溝・土城子の守備隊勤務(第3節)、岫巖の第一大隊本部勤務から帰国まで(第4節)、の三つの部分に分けて紹介する。

## 2) 仙台出征から清国安東県に到着まで

本書は全10章の構成であるが、最初の3章が本節に相当し、目次はつぎのような内容を示す目次である。

第壹章 発端朝鮮国東学党蜂起の概略より日清戦争となり尋て第二師団予備後備隊出発広島到着迄の記事

第二章 宇品港解纜航海朝鮮国大同江口魚隠洞到着緑沙浦上陸行軍黄州鎮宿舎平壤府安州城に至るの記事

第三章 安州以北の郊村及び東林鎮西林鎮經過義州府着營尋て鴨緑江堅氷騎馬行清国九連城安東県に至るの記事

第1章は、日清開戦、渡辺の召集そして広島への移動を描いている。渡辺は老齢ながら召集されて戦争に参加できることを喜んで、「此度は甲斐甲斐しくも大君の御書かしくみ出る老の身」と、また同じく召集されて新潟から赴任してきた旧友の榎野一等軍医に再会して、「老の友小手膺あてに身をかため霰降る野を踏むそ嬉しき」と、詠んでいる。

召集後、歩兵第4連隊所属から後備歩兵第3連隊に所属替えされた。第2師団本体が広島に出征した後も、1ヶ月以上仙台に待機し、後備歩兵連隊1697名は12月4日、ようやく仙台駅から広島に向けて出征した。人々を送ることに倦み疲れていた渡辺は、「友とちをおくるきのふに引かへて送らるる身となるそうれしき」と率直に出征の喜びを述べた。鉄道沿線には見送りの人が詰めかけた。彼は出身地白河での見聞をつぎのように記す。

白河は我故郷なるか、出発の事は兼て通知し置たれはいかがならんとおもへるに、其刻限は翌暁二時過ぎなるに数多の人々出迎へ、其中に名を高く呼ぶあり、是れ親類なるべし、答ふる間もなく早くも汽笛の声となりぬ。

窓明て見かはす顔も一と声の笛と過ぎ行く夜半の故郷  
 汽車は走り出したり、過ぎ去りし親達の御墓は関川寺月心院と云ふ所にあり、汽車の中より拝しぬ、月も明かに寺の樹木を照らせり。

## 走り行く車に起て関寺の森の月顔ふしおかみつ

渡辺は江戸での医学の修行から帰り、20歳の頃に塩竈に移り住んだ。それ以来ほとんど帰郷していなかったが、故郷を懐かしむ気持ちはかえって強くなっていた。東京鎮台勤務中の1880年、東京鎮台管下の各府県を糸井中尉とともに巡回した際、たまたま白河で旧知の井上大尉・山田軍医が東北に向かうのに会い、4人は酒を酌み交わし、漢詩を賦した。その時、渡辺は自分の生涯を回顧し、辞職後は故郷に帰り、先祖両親の墳墓の塵を払い、香花を供えんことを期した（『漫遊詩草』、表2参照）。

広島到着から12月21日の朝鮮大同江緑沙浦に上陸までは、すでに第1章第1節で述べたので省略する。これ以降、渡辺は乗馬して、友田連隊長、菅波允升副官とともに平壤に向け進んだ。上陸後最初に出会ったのは、白服を着た多数の朝鮮人人夫であった。日本軍は輜重能力が低く、10万人を越える日本人軍夫を雇用しても足りず、さらに延べ人数で1200万人を越える朝鮮人人夫を使用したと、参謀本部編『明治二十七八年日清戦史』は述べるが、渡辺の見た人々もその一部であろう。朝鮮人でも人夫の長と官吏は着色した服を着ること、全員が2尺5寸（75cm）もある長煙管を持ち、火打石と火口を入れた袋を前に垂らしていると、はじめて見る異国の風景を描いている。

平壤への沿道で渡辺の目を引いたものは、路傍に立つ善政碑や頌徳碑であった。平壤への渡口である船橋里まで来ると大同江は凍結しており、乗馬したまま渡河することができた。平壤の戦いの際、歩兵第11連隊がここを渡河したことを思い出して、「川波をかちわたりせし人ならて氷ふみ行く身こそつらけれ」と詠んでいる。平壤では城内を巡検して、関帝廟と箕子廟（殷紂王の叔父で、殷が滅んだとき、周の武王に朝鮮王に封じられたという伝説上の人物）を見た後、牡丹台の激戦の跡を経て、万寿台の日本軍将校戦死者の墓を訪ねた。

12月25日、平壤を発って義州に向かった。町を出ると、路傍に清国兵

の死体が散乱していた。一部は戦闘終了後に仮埋葬されたが、衣服を剥ぐため掘り起こされ、犬や鳥の餌食となった遺体がここかしこに散乱し、道路から離れた山陰の死体は放置されていると述べ、「かれくさのしかはねおほふあたし野をとふらふ人のなきそかなしき」と記している。

27日の安州鎮に到着したが、気温が零度以下に下がり、降雪の上に道路が凍結して馬も歩行に悩んだ。これから以北、義州までは、戦闘の過程で焼き払われた村落が続いており、食糧も不足して「初めて戦地の状況となれり」と渡辺は述べ、「村里は残るくまなくやきうせて雉子鳴く野となりにけるかな」と沿道の惨状を表現している。この年の大晦日は宣川府で過ごした。ここには元同僚の石田一等軍医が後備歩兵第6連隊第2大隊医官として滞在していたので、早速二人は酒を酌み交わして語りあった。

翌日は1895年（明治28）の正月であったが、渡辺一行は強行軍をつづけた。日記には、この日東林鎮で孔子廟を礼拝したことと、翌日所串館兵站部で、大砲・小銃・弾薬その他の分捕り品の山を見たことが記されている。正月3日、目的地である朝鮮最北の町、鴨緑江に面する義州に到着した。ここには義州兵站司令部、北部兵站監兵站病院などが置かれ、渡辺の属する後備歩兵第3連隊本部もここに設置された。早速連隊本部に出頭すると、第1大隊第4中隊に属して清国盛京省大東溝守備隊勤務を命じられ、休む暇もなく、翌日4日義州を発ち、鴨緑江を渡河して清国領の安東県に向かい、義州の対岸の九連城にある第5師団本部に立ち寄り、午後3時目的地に着いたところで、第3章が終了する。

以上の3章は仙台から駐屯地への移動過程で、とりわけ朝鮮北部に上陸して清国にはいるまでは、厳しい寒気の中の強行軍に継ぐ強行軍であった。したがって、移動経過は詳細に書かれるが、渡辺自身の異国の事物に関する価値判断はほとんど書かれていない。清国軍の弱体について、九連城を見て「此江山砲壘あるも支ゆる氣力なく置去り退却せり」などと批判するところが何ヶ所かあるほかは、唯一の清国批判は弁髪批判である。弁髪を

見て、「国の定制とは云ひなからいと見にくき事になん そのかみののりのために頭部をいのこの尾毛に造る国たみ」と評した。弁髪は女真族・満州族の風習を中国人に強制したものである。したがって、この批判は清国批判であっても、中国批判にならない所が漢籍に親しんだ渡辺らしい所である。

### 3) 大東溝・土城子の守備隊勤務

つづく第4章から第7章までの4章が、約半年間の守備隊勤務を描いた部分で、渡辺の清国体験と清国観の一番面白い所である。まず目次を引用するとつぎのようである。

第四章 安東県出発大東溝到着守備隊付勤務及び地方景況清国人病者施治に係るの記事

第五章 大東溝出発前進龍王廟經過土城子到着守備隊付勤務二月一日酷寒大風雪凍傷患者発生等に係るの記事

第六章 同上守備隊勤務中其地人民兵乱後困難の景況及び諸方の書簡贈答等に係るの記事

第七章 同上勤務中大孤山港に至り地方并に人民視察の記事及び龍王廟方面五道橋架設其他の記事

1月5日安東県を出発した渡辺は、6日大東溝に到着した。この途上で彼が目にしたのは、自分の馬車を駆って日本軍の荷物運搬で賃稼ぎをする清国の農民たちの逞しい姿で、彼らが酷寒に対応するため、機能的な防寒着を着ていることに素直に感心している。これに対して、日本人はといえ、前線の野戦隊に従軍していた軍夫が「凍傷其他の病患に罹り解雇の者陸続帰来す、其有様面部は煤にまみれ、手足を凍傷に憫みて歩行蹣跚、破れ毛布にまつはり、頭巾は清人を真似て種々の毛皮を冠ふり」という惨状を示し、一方で「新募の前進軍夫は意気揚々大刀の地を引く程なるを帯び、或は仕込杖を突もあり、眼には雪除け青眼鏡、鼻頭には「レスフラト」を

掛け、頭巾も亦毛皮或は羅紗綿入」という奇怪な出で立ちで、また軍人は軍服の上に急造の「防寒用鼠毛布大幅外套」を着ていた。清国人の機能的な防寒着に対して、日本人は軍人も軍夫も、急造不統一の防寒着で、「百鬼夜行も斯くやあらんとおもはれたり 物の怪の夜の往来もかくあらん寒さをふせく人のよそほひ」と評している。

7日、中隊長心得藤井幸槌中尉とともに、第3師団歩兵第18連隊と守備隊を交代した。この時、日記をつけることを思いついたことは既に紹介したところである。大東溝は約30年前に、鴨緑江河口に相對して清国側に開削された人造の港で、木材集散地であった。冬季は結氷して、木材と大小の船が閉じこめられていた。市街の人家は「約四五百戸」と渡辺は見た。前任の守備隊医官が清国人の治療をおこなったので、渡辺が赴任すると施療を乞うものが次々と訪れた。守備隊と大東溝を通行する軍人軍夫の診察に支障がない限り、診療と往診をおこなうこととし、兵站部用弁人の鞠子明という山東出身の書生が筆談で通訳を担当し、宗江という大東溝の売薬業者が毎日診療所に来て手伝った。渡辺はその感慨を「年老てつたなき業を外国のいたつき人にむかへられけり」と述べた。

赴任後10日ほどで、兵站部は第2軍が占領した大連湾に移り、守備隊も内陸部の岫巖に近い土城子に移転すべしとの命令に接した。大東溝の清国商人の陳情により、守備隊若干名を残すことになったが、その報謝と送別の宴が大東溝有力者の招きで1月20日、大東溝公議所でおこなわれた。表面上は占領軍と地元民の関係は良好で、渡辺は「四方の海みなはらからと云ひつとふひじりのおしへ今日そしらるる」と詠んだ。「ひじりのおしへ」とは、中国の古典にいう「仁義の政あり、忠信の交りあれば、四海皆兄弟なり」ということである。

23日大東溝を發ち、25日新赴任地の土城子に到着した。途中、龍王廟を通過すると、渡辺は早速、地名の由来となった龍王廟を訪ねて、興味津々で内部を見学している。彼が特に興味を持ったのは、展額や柱に記さ



れた対聯で、龍王廟内は勿論、新春準備のために民家の門戸に貼られた紅箋の対聯に至るまで、一々読み取って記録した。「門毎にくれなみ紙に書き記す文字のかすかす祝ふはつ春」と記した彼は、文字の国に来たという感慨に耽った。

土城子は大洋河に沿った山間の小集落で、民家の半ばは兵乱で人民が遁走し、屋根や壁が壊れていた。周囲は裸山にて薪炭もなく、塵芥に泥土を混合した泥炭と称するものを焚いてわずかに暖をえる有様だったが、河が澄み渡り水が清らかなことだけは好ましかった。この日から雪が降りはじめ、2月にはいると強風が吹いて気温は零下20度まで下がり、積雪は5尺に達した。土城子は、岫巖から龍王廟、大東溝、安東県とつづく交通の要衝であった。2月10日には、岫巖・海城の野戦負傷患者を大弧山に転送するための患者運送部を設置する命令を受け、一層大量の患者を受け入れるようになり多忙を極めた。渡辺は「銃創患者は十分の二にもあたらすして、多分凍傷或は難病なり」と記録し、「城をぬきとりてをたくますら男も吹雪ののべにたちなやみけり」と詠っている。

この頃、渡辺は疲れからか病臥した。その時、慰問品の中にあつた「百戦百勝宮城県職員一同」と染め抜かれた慰問の手ぬぐいを見て慰められている。弱気になった時思い出したのは、それより10日程前、病気になつた兵隊が、「良き薬たまはりて救はれよ、宿元には老父母妻子あり、願はくは生きて帰朝したしとてさめさめ泣」いたことである。兵士に同情した渡辺は、「人の心はいにしへも今も同じ事」と述べて兵士をねんごろに慰めた上で、「国にむくふいくさの群に入る人も病みては家をおもふなるらん」という歌をつくった。擬古文というメディアの特性からか、兵士が故郷や家族を偲んで泣くことが肯定的に捉えられている点が、日清戦争より後の戦争の従軍日記と異なる点である。

この頃、渡辺の日記には清国人に関する様々な観察と記述が見られる。単純な所では、中国家屋のカンチャンあるいはオンドルと称する暖房設備

を賞賛する一方で、便所の不備不潔を批判している。またある時は、海城の戦鬪で負傷した清国捕虜を治療した後で筆談を試みたが、筆談が故郷の家族に及ぶと、捕虜は「今日捕虜となり日本に占領せられたる旧国を通過し、恥辱と病苦と併せ至る、何ぞ家眷に及ふの暇あらん」として筆を投げたという。これを見た渡辺は捕虜に同情して、「とらはれてやふれし国を過る身は家路のたよりいかにおもはむ」と述べた。これなどは清国人捕虜に人間的に共感する彼の態度を示すものであろう。春分になると、避難先から帰村した農民は耕作の準備に励んだが、家屋が破壊され、農耕具もなくなり苦しんでいた。これを見て渡辺は「七年の凶歉に逢ふとも一年の軍に逢ふなかれとは能くも云ひたり」と同情したが、その解決法を「新版図をして我王化に浴せしめ仁徳帝の御製のことくせまほしくおもへり あたらしくなつきし民も年月のすきなは太きけふりたつらむ」と述べて、清国人が日本に同化することに求めた。

3月になると、懐かしい人々との出会いや連絡の記事が見られるようになった。3月7日、ある軍人が来訪して、渡辺に文弱問答を吹っ掛け、その日の午後には、仙台で近所に住む桑原二等軍曹が来訪した。翌日8日には、広島に帰る鈴木軍曹に、石黒衛生長官宛の短歌2首を託した。17日、初めて仙台の妻から手紙2通が届いた。よく見ると、1通は昨年12月広島に宛てたもの、もう1通は今年1月朝鮮に宛てたもので、各所を回りまわって、3ヶ月をかけて到着したものである。渡辺は早速和歌2首を添えて返書を書いた。前節で述べたように26日には、訪ねてきた熊沢安定歩兵大尉と封印していた詩を賦して語り合った。

また、3月10日に大孤山戦地定立病院を公用で訪れた。用事が終わった後、大孤山市街を巡り、さらに郊外の魁星楼、天后宮（馬祖廟）、石人山（小弧山）を訪ねている。この2日間の見聞を記す渡辺の筆からは、彼が異国の事物をワクワクしながら記録している様子が伝わってくる。とくに天后（馬祖）などの道教関係の施設は、仙台では見るできないの

で、興味津々で見聞を楽しんでいる。6月に入って岫巖より大孤山に移動して帰国の便船を待つ間にも、渡辺は天后宮に隣接する聖水宮に登り、眼下に広がる絶景に感動し、三国干渉でこの地が清国に返還され、かつ自分も60歳を越えたので、再来することもないだろうと感慨に耽っている。

#### 4) 岫巖の第1大隊本部勤務から帰国まで

第8章から第10章までの最後の3章は、土城子よりさらに内陸の岫巖での勤務と講和条約締結以後の仙台への凱旋までを扱う。例によって渡辺の著書の目次を引用する。

第八章 土城子出発前進途上の見聞及び岫巖到着以後城市中市街乱後の景況視察に係るの記事

第九章 岫巖守備隊勤務中地方一般の景況并に休戦条約以後彼我人民の挙動及び日清講和結了祝宴に係るの記事

第十章 岫巖出発大孤山に至り待命滞在其他の景況及び悪疫大流行帰朝大坂桜島上陸尋て汽車仙台到着迄の記事

土城子から岫巖への移動命令を3月27日に受け取り、翌朝土城子を発ち、29日岫巖兵站部に到着した。岫巖には後備歩兵第3連隊第1大隊本部があり、大隊長の井上享少佐とも久しぶりに再会した。渡辺は兵站部患者集合所を後備歩兵第3連隊第1大隊医務室として、勤務をはじめた。

下関では講和談判が進みつつあり、3月30日には休戦条約が調印された。その後の経過を列举すると、4月17日日清講和条約調印、同23日独露仏3国が遼東半島の清国への返還を勧告（いわゆる三国干渉）、同29日御前会議で三国干渉受け入れが決定され、5月8日清国烟台で講和条約批准書交換、同10日に遼東半島還付詔書が發布されるとともに征清大総督府が清国軍に対する作戦中止を命じた。渡辺の日記には、4月9日、新聞にて講和条約談判の結果を見る、あるいは5月28日、批准交換決了の報を受けて岫巖兵站司令官会主となって宴を張る、等の関連記事が見える。

渡辺は大隊長と気楽に話せる立場にあったが、それでも内陸部への情報伝達は遅れ気味であったようである。さらに内陸にある鳳凰城の場合は、占領と守備に当たっている日本軍分遣隊には遅れ気味でも講和談判の情報が伝わったが、鳳凰城の周辺に残存した清国軍（八旗兵）は講和条約そのものを知らずに、攻撃を続けているとの記事が『東北新聞』に見られた。

渡辺は岫巖市街を通訳官金氏（朝鮮人）の案内で2日間にわたって見物し、つぎのように記した。「此地は往古愛親覚羅氏の創業にして、後に奉天府を開きたりと云ふ。近来まで岫巖庁を置きしに、光緒二年改めて岫巖州となし鳳凰庁の所屬となる。人家大約一千五百戸、地形南北に長く、東西に短かき方形廓なり」。この後、城内の官衙の有様、清国の軍制（八旗）、商店・民家の様相を紹介した。岫巖は古都なので、さすがに儒学を教える訓導衙門があり、中には孔子とその高弟を祀る大成殿があった。占領下で岫巖民政庁に使用されているその建物の結構を渡辺は伝えた。今まで道教関係施設は見学したが、儒教施設は朝鮮北部の東林鎮で孔子廟を門の外から礼拝しただけだったので、早速に本場の大成殿に参拝して、「あらたまをきりみかきする山里はひしりのみちもひらけぬるかな」と満足げな歌を詠んだ。

「毎日診断の患者も兵隊及び軍夫人員総数に対して少なし、畢竟温暖の好時節となりたる故ならん」と記した渡辺は、診療の余暇に盛んに市内・市外を探訪して、貪欲に岫巖の風物と清国の風習を記録した。有名な岫巖の石細工を求める日本人の需要に応えるため石細工屋が繁盛していること、東街の寺院にかかった演劇を兵卒・軍夫および清国人老少男女数多が見物したこと、さらには陶器修理法、婦人の装飾品、結婚式と葬式の有様、果ては纏足や阿片吸引の実情に至るまで、渡辺の日記に記録されないことはない程であった。

5月2日、強盗犯3名が北門外で、憲兵によって日本刀で斬殺された。兵卒・軍夫・清国人の見物の群衆山の如しという有様だったが、ある清国

人が椅子数脚を持参して貸賃五錢宛を得ようとしたことを見て、その商魂に「清人の時に臨て利を射る事の鋭ときは中々我人の遠く及ざる所なり」と、驚いている。

6月に入るといよいよ帰国の気配が高まった。6月9日、第2師団歩兵第16連隊第3大隊の一部到着して、翌10日守備隊勤務を交代した。12日には後備歩兵第3連隊に大孤山に集合の上、帰朝を待つべしとの命令が下された。渡辺は斎藤中尉と先発して、大孤山で連隊を受け入れる宿舎の確保と衛生施行を命じられ、15日岫巖を発ち、17日大孤山に入った。途中の農村は春耕の最中で、清国の農民達は占領者である日本軍に目もくれず立ち働いていた。講和条約で日本領となると聞いて、人民教育・衛生施行・その他諸々の改良策を具申することを考えていた渡辺は、遼東半島返還という想定外の事態に、「帰国ののち諸友人に何んとかたらふへくともおほへす唯々茫然として打過きぬ 血けふりの後はみとりの陰となりこうしもろともいこふ村人」と言うのみであった。3月26日に土城子滞在中の渡辺を訪ね、和歌漢詩問答を吹っ掛け、久しぶりに漢詩を作って楽しんだ熊沢安定大尉は少佐に昇進して、今は大孤山民政支部長であったので、早速招かれて深夜まで語り合っている。

大孤山に集結したものの乗船命令はなかなか出なかった。輸送船中でコレラが発生し、そのために帰国が遅れるとの噂が届いた。帰心矢の如しとなった渡辺は、「老人の哀しきは此短夜すら幾回となく夢も醒め、数種雑多の事考かへ出せり」と述べて、痛烈な清国政府批判、すなわち清国政府が内紛で不安定であるにもかかわらず、某国の教唆を受けて日本に対する忘恩的政策を展開していると述べ、「其無礼無作法憎むに堪へず、所謂恩に報ゆるに讐を以てせるなり」と断罪した。

大連湾・金州地区と朝鮮義州で流行していたコレラは、帰国を待つ後備歩兵第3連隊を襲った。表1に掲げたように、6月29日に第1大隊輜重輸卒が罹患したのを最初に、たちまち患者が続発し、次々と死者が生じた。

待ちに待った乗船帰国命令が7月15日に下され、一同狂喜したが、当日から翌16日の乗船の過程でも新たな患者が続発し、患者は大孤山病院に収容された。帰国船から降ろされて病院に送られる患者を本船から見送った渡辺は、「患者は端艇に臥居りしか兩三度頭をもたけて見送れり、彼俊寛を鬼界島に残したる昔語も斯くやおもはれたり」と述べる。17日抜錨した船中でも、渡辺たちのコレラとの戦いは続き、下関の彦島検疫所、大坂桜島検疫所と、到着地毎に患者を残していかざるを得なかった。渡辺の歌日記最後の歌は、対馬神崎灯台を見た時に作った、「西の海しつまりかへるあかつきの寢覚に見るや日の本の山」である。これは1860年（万延1）、条約批准交換のため米国に渡った新見豊前守等の一行に随従した仙台藩士玉虫左太夫の漢詩の本歌取りである。戊辰戦争の後、藩内の内紛もあって責任を取らされて切腹させられた玉虫を思い出したのであろう、「其人既に地下に去り此実況を話する事を得ず遺憾限りなし」と記している。ともかく、後備歩兵第3連隊は7月24日午前11時5分仙台停車場に到着し、凱旋歓迎の人波の中を榴ヶ岡<sup>つじ</sup>歩兵第4連隊兵舎に入った。

## 5) 小括

以上で紹介してきた渡辺重綱の『征清紀行』の叙述を読んで、読者はどのように思われたであろうか。60歳の老軍医（当時の基準では老人の部類に入る）は、ただならぬ好奇心の持ち主であった。書物の世界で知識として知っていたが、はじめて見る清国の風土・建築・生活慣習に、胸をときめかせながら観察してまめまめしく記録する渡辺の積極的な姿に、筆者は感動さえ覚えた。儒仏道三教の宗教施設の結構と荘厳に感嘆し、文字の国らしい扁額や対聯を興味深げに一々読んで記録した。清国農民のたくましさや勤勉さ、防寒を第一に考えた彼らの衣服や住居を素直に賞賛している。

一方で彼は清国文化・慣習と清国人のすべてに賛同したわけではない。

例えば、弁髪、纏足、阿片吸引、便所の不備などを批判し、清国軍の怯懦や清国政府の内紛や外交政策についても厳しい見方を持っていた。

当時の新聞には清国の家屋の不潔さと異臭を強調して、これを野蛮の表象として蔑視する風潮が強かった。例えば、「支那土人は野蛮極まり、民家に入る時は堪えられぬ程臭気激しく候」(『東北新聞』1895年3月3日「温泉湯よりの通信」)という言い方である。中国人に対する呼称も、「清国人」から、「豚人」「支那土人」「チャンチャン」という蔑称が普通になり、中国人の弱さと物欲を嘲り、不潔・臭気を野蛮の象徴と見なすようになった。渡辺の特長は、便所の不潔や清国軍の怯懦さを批判しても、それが単純に清国人蔑視に結びつかない所にある。便所は不潔で臭いが、別の面を見れば良い所もあるではないか、という見方である。渡辺はオランダ医学を学んだので、文明と野蛮を対比するという物の見方を当然持っていたが、それを日本は文明で、清国は野蛮という単純な構造に結びつけなかった。そして、当時普通であった清国人に対する蔑称を決して使わず、一貫して、清国・清国人で通している。

渡辺の事物や人間を観察する視線は優しかった。日本兵・清国兵の区別をせず傷病兵に共感し、慰めたこと、戦禍に襲われた清国農民に深く同情したことなどは既に述べた所である。観察が周到で、判断も複眼的で、狭い偏見にとらわれていない。これらのことが、渡辺の歌日記を魅力的なものにしていたと考える。

それでは、多くの日本兵はなぜ簡単に偏見にとらわれたのであろうか。「はじめに」の部分で述べたが、差別・偏見に満ちた手紙は、清国に到着した直後から書かれている。つまり、清国の事物を注意深く観察することなく、兵士は差別表現に満ちた手紙を書いている。観光客が、パリならエッフェル塔と凱旋門、ニューヨークならエンパイアステートビルと自由の女神という、地元の人誰も行かない、記号化された観光スポットをまず訪ねて安心するように、日本の兵士たちは記号化された差別的な清国像を、

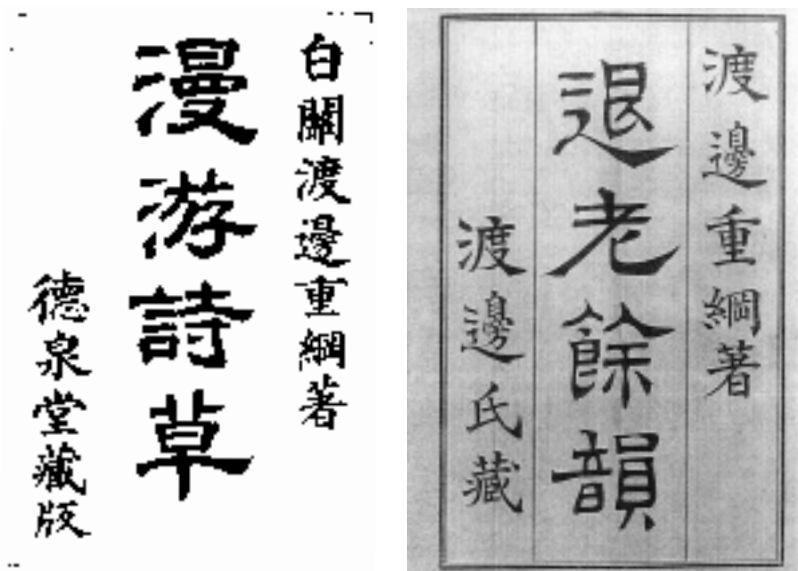
他人の表現を真似して、決まり文句を使って、手紙に書きつづったように思われる。徴兵制下の日本の兵士たちが、年齢が均一で、若くて、未熟であったことも一因である。

渡辺のまなざしが暖かく、観察力に優れていたことは分かった。それでは何故、複眼的あるいは多元的な判断をすることができたのか、その理由は彼の経歴に関係しているのではないかというのが筆者の仮説である。

## 2 渡辺重綱の生涯と人物

—『漫遊詩草』と『退老余韻』の世界—

第1章では渡辺の日清戦争従軍の歌日記である『征清紀行』を読むことで、彼の体験と清国・清国人観を検討した。その結果、彼は清国に対する優越感や差別感を持たず、自分の知識の中の中国を現地で確かめ、新しい



『漫遊詩草』（1893年）と『退老余韻』（1909年）の表紙



体験をすることに熱中し、感動していたことが分かった。

つづいて本章では渡辺の生涯と人物像を現在分かる範囲で確認し、彼の清国・清国人観が生まれてくる素地を確認したい。生涯の年譜を作る史料として、渡辺の詩文集である『漫遊詩草』と『退老余韻』を使用する。とりわけ、遺稿集『退老余韻』の巻頭に掲げられた、仙台の著名な郷土史家雨香鈴木省三よる「白関渡辺翁伝」は、渡辺から直接その生涯を聞いていた長年の知友による、簡にして要を得た略伝でもっとも参考になった。

まず最初に、仙台関係の人物を調べる際に必ず最初に引いてみる、菊田定郷『仙台人物大辞典』（1923年）の記述を引用する。

軍医。通称徳次郎または市松、或いは由蔵と云ふ、白関と号す、岩代白河郡北郷下小屋村に生まれる、医を以て仙台藩の番士に列す、維新後陸軍一等軍医に任じ、日清戦役に功あり、正七位勲六等に叙せらる、重綱詩を善くし、漫遊詩草、退老余韻等の著あり、明治四十一年四月歿す、享年七十五、仙台市東大番丁大聖寺に葬る。

ここから、彼は現在の福島県白河の生まれで、武士ではなく平民の生まれであること、医学を学んで身を立て、仙台藩士、戊辰戦争後は陸軍軍医であったこと、日清戦争に従軍して、正七位勲六等に叙せられたことが分かる。正七位勲六等は長年軍医を務め、戦争に従軍したにしてはやや低めかと思われる。この他には、詩文を良くしたことと、1908年享年75歳で死去したことが分かる程度であり、さらに詳しくは、『漫遊詩草』と『退老余韻』から作成した「表2 渡辺重綱年譜」で確認する必要がある。

## 表2 渡辺重綱年譜

1834（天保5）2月28日、岩代白河郡北郷下小屋村に生まれる。名は重綱、幼名は徳次郎、医者となって秀伯と改名、文芸活動の際は、白河の関、つまり白

関と号した。父の名は忠綱、忠七と称した。母は安達氏の出身。最初、母方の親戚で、代々白河藩の鉄砲鍛冶を勤めた添田富士郎の養子となったが、家業を嫌い、医学を学ぶ道を選び、渡辺杏伯に学んだ。

1852（嘉永5）養父添田富士郎が死去すると、義姉の夫清吉が鉄砲鍛冶の家業を継ぎ、重綱は渡辺に復姓し、白河藩士野口に従って江戸に向かう。医学修行の志があったが、翌1853年ペリーが浦賀に来航し、世情騒然としたので、江戸滞在1年にして帰国した。

1855（安政2）義母の鈴木氏（重綱は既に結婚していたのだろう）の勧めで、仙台藩領塩竈に行き、鈴木家に居候した。塩竈は港町として栄えており、ここで彼は医者仲間の成田正庵、田村隆庵、亀井宗倫に医学を学び、猪股松順、永井隆泉等と交わったという。医師として招聘された島で、たまたま疫病が流行して妻を失う。

1858（安政5）塩竈に帰り、天童家（宮城郡八幡要害、134貫文、約1300石）の家臣中山弥門の娘と再婚し、天童家の禄を受けることとなり、八幡に住む。

1861（文久2）亀井等と詩文の結社を結び、偶々来訪した岡鹿門を盟主とする。

1865（慶応1）塩竈石堂山（JR東北本線塩竈駅付近）の一面を開墾して薬草を植える。

1866（慶応2）塩竈南町に転居。ここは塩竈神社の南側で、石堂山と接していた。

1867（慶応3）火災に遭い、家財を蕩尽し、石堂山に居を移す。

1868（慶応4）仙台藩は会津藩討伐の命令を受けて出陣、この時渡辺は仙台藩の直臣となる。ところが藩論一変、奥羽越列藩同盟が成立したが、9月22日会津藩が降伏、仙台藩も同月24日亘理で降伏した。朝敵となった仙台藩領が大幅に減封されると、渡辺は塩竈石堂山に帰る。この時、松島に避難していた蘭方医で徳川慶喜の側近として著名な石川桜所に師事し、渡辺は本格的にオランダ医学を学んだ。34歳。

1869（明治2）石川桜所が函館の幕府軍に通じた嫌疑で逮捕され、仙台監獄に収監された。

1870（明治3）石川が釈放され、松島に戻る。渡辺は再び石川に師事した。

1871（明治4）石川が兵部省軍医寮に出仕、後に軍医監となる。渡辺も仙台に居を移す。

1872（明治5）渡辺は仙台鎮台病院出仕、この後東北鎮台歩兵第2大隊医官となる。38歳。

- 1874（明治7）東京鎮台軍医となり、一時台湾蕃地事務局長崎病院勤務。
- 1875（明治8）帰京、同年5月から翌1876年2月まで、九州を巡視する。
- 1877（明治10）琉球出張を命じられるが、同年2月西南戦争勃発、大阪陸軍臨時病院勤務を命じられる。佐藤軍医監が統括、石黒軍医正が補佐、収容負傷者約5200人余。10月東京へ帰る。12月5日、再び琉球出張を命じられ、鹿児島経由で琉球に向かう。
- 1878（明治11）那覇古波蔵の陸軍兵営に滞在、6月帰京、教導団副医官となる。翌年半年間の琉球滞在の見聞を『琉球漫録』に著す。同書発行時の住所は、東京市神田区今川小路3丁目3番地。
- 1879（明治12）7月義母が死去、仙台に帰省して葬儀をおこなう。
- 1880（明治13）2月から6月まで、東京鎮台管下（新潟、長野、山梨、関東各県）巡回。
- 1881（明治14）東京鎮台から再び仙台鎮台に転任。47歳。
- 1882（明治15）2月から4月まで、徴兵医官を命ぜられ、東北各県を巡回。
- 1883（明治16）歩兵第4連隊第3大隊医官代務。
- 1886（明治19）5月陸軍一等軍医に任ぜられ、7月正七位に叙せられる。9月山形県徴兵検査医官を命ぜられ、長曾我部軍医と巡回中、12月上旬、村山郡左沢駅で病臥。
- 1887（明治20）2月休職を命ぜられる。9月門人菅野良と藤田病院を開設。
- 1889（明治22）退職、予備役に入る。恩給325円を給せられる。55歳。
- 1890（明治23）藤田病院を閉じる。
- 1893（明治26）『漫遊詩草』（仙台・徳泉堂）発行、住所は仙台市東一番町44番地。
- 1894（明治27）日清戦争開戦とともに、60歳にして9月召集され、後備第3連隊所属として出征。大東溝、土城子、岫巖で勤務。翌年1895年7月凱旋。勲六等瑞宝章授与。
- 1896（明治29）2月『征清紀行』発行。6月三陸津波、県の依頼により本吉郡で救護活動。
- 1904（明治37）70歳にして日露戦争に従軍志願、国民兵第1大隊所属となるが、発病して免職、以後杖なしでは歩行が困難となる。賜金150円。
- 1908（明治41）3月28日木村軍医監をたずねて、先師石川桜所の追遠について相談中倒れる、4月3日死去。享年75歳。
- 1909（明治42）遺稿集『退老余韻』発行。鈴木省三の「白関渡辺翁伝」あり。

渡辺は武士ではなく、福島白河出身の平民であった。母方の親戚の養子となり、本来なら白河藩お抱えの鉄砲鍛冶になるべき所、医学の道を志し、短期間ではあるが江戸で修行した後、当時繁栄していた港町塩竈で開業した。ここで医学の知識を深め、詩文を通じて多くの知友を得た。2度目の結婚で仙台藩有力家臣天童家の家中の娘と結婚したことから、まず天童家に仕え、ついで仙台本藩の直臣となった。彼は自分の努力と能力で、鉄砲鍛冶の息子から仙台藩の陪臣、そして直臣へと出世した。ところが戊辰戦争で仙台藩が朝敵となり、大幅な減封に直面すると、渡辺の人生は振出しに戻ってしまった。時に34歳で、当時の感覚では既に中年に差し掛かる年齢であった。

彼の2度目の人生は、石川桜所との関係ではじまった。石川桜所は仙台藩出身の著名な蘭方医で、徳川慶喜の側近でもあった。今泉彪『仙台人物史』（1909年）の記事を要約すると、桜所の経歴は次のようである。

名は良信、号は陸舟庵。登米郡桜場村の生まれ。西洋医術を伊藤玄朴に学び、後長崎に行き蘭人某に親灸、帰って仙台藩医員に抜擢される。後に幕府に徴されて將軍侍医となり、慶喜に信任され、国務にも参画。戊辰（慶応4年）の際は、慶喜に従い大阪より江戸に帰り、寛永寺に入り、ついで水戸に移る。さらに仙台に帰り、松島に寓する。明治2年逮捕され、翌年釈放。明治4年兵部省に出仕、軍医介、ついで軍医監に任じられ、従五位に叙せられる。病を理由に職を辞して駿河台香雲閣に隠退、明治13年2月20日没す。享年59歳。蘭書内科簡明を訳し、林洞海石黒忠恵と3人の共著として出版。詩文を善くした。

年譜にあるように、渡辺は戊辰戦争後、仙台から塩竈に帰った時、近くの松島に逃れていた石川桜所に弟子入りし、本格的にオランダ医学を学んだ。一時投獄された後、1871年から石川は兵部省に出仕して軍医の道を歩み始めた。石川に師事していた渡辺も、おそらく彼の推薦で1872年から軍医となった。38歳である。石川の縁で、日清戦争時の野戦衛生長官、

即ち陸軍医事行政の責任者であった石黒忠恵とも知り合いになった。渡辺は、仙台と東京で主に勤務し、西南戦争の際は大阪陸軍病院で、翌年は沖縄で、それぞれ半年程働いている。そして1886年山形県徴兵検査医官として県下を巡回中、村山郡左沢駅で病臥し、翌年休職を命じられた。1889年退職して予備役に入り、恩給325円を給せられている。55歳であった。渡辺は人並みの愛国者で、陸軍組織を愛していたらしいが、所詮は傍流の中年軍医であり、陸軍と自分を一体化させることはできなかったようである。師事した石川桜所は軍医監になったが、病気を理由にさっさと辞職して駿河台に隠棲した。そこは東京鎮台時代に渡辺の住まいがあった神田区今川小路からは目と鼻の先であった。

渡辺はいつも2つの世界に属する人であった。学問では漢学・漢方とオランダ医学、前半生は仙台藩関係者として、後半生は新政府の陸軍軍医として、職業は医者であるが、趣味の世界では詩文のサークルに属していた。

戊辰戦争後処刑された仙台藩士玉虫左太夫の漢詩を本歌取りした和歌が『征清紀行』の最後の和歌であり、「其人（玉虫一筆者注）既に地下に去り此実況を話す事を得ず遺憾限りなし」と記していることを第1章第4節で紹介した。退職後の1893年に発行した『漫遊詩草』には、星恂太郎に宛てた詩2編を掲載している。星は仙台藩の洋式精鋭軍額兵隊を率いて脱藩し、箱館で榎本等の旧幕府軍に属して、新政府軍と闘った男である。渡辺は軍医として職業柄各地を巡回することが多かったが、故郷白河では戊辰戦死墓、箱館では碧血碑に詣でて鎮魂の詩を賦している。いずれも新政府軍と闘って破れた、「賊軍」側の墓碑であり、彼の心の故郷もそこにあったのだろう。新政府の陸軍はまさに薩長の権力の源泉であった。渡辺のような部外者は医師という特殊な技術を持つが故に重宝がられはしたが、中枢にはいることのできない、境界人（マージナルマン）であった。このような彼の生涯と境遇が、彼の物の見方に影響を与えた可能性は高い筈である。

## おわりに

渡辺の本で今も論文に引用されて、学問の世界で歴史史料として命を保っている本は、『琉球漫録』（1879年）であろう。この本は、琉球処分の直前の1878年に那覇古波蔵の陸軍兵營で半年間勤務した際の見聞録で、筆者は最近そのコピーを撮って読んだことがある。彼の人柄と、複雑な経歴に由来するのであろう、沖縄の風土と人を見る渡辺のまなざしは暖かい。本論文で取り上げた『征清紀行』も戦時の敵国の見聞録とはいえ、ほぼ同様の読後感を筆者は得た。友人の郷土史家雨香鈴木省三は、退職後の渡辺は、客と酒を酌み交わし、詩文と風月を論ずることを愛す、「遺世之人」のようであったと評した（『退老余韻』の「白関渡辺翁伝」）。

渡辺の日清戦争従軍記がステレオタイプの中国蔑視論に陥らなかった理由は、彼の人柄、中国文化に親しんだ学習経歴と教養の世界、複雑な境界人としての経歴と60歳という成熟した人格、そして擬古文の歌日記というメディアの特性が考えられる。彼のような清国観を持った日本人は、日清戦争当時まだ少なくはなかった。たとえば勝海舟の日清戦争に関する言説と共通点があるように思う。しかし、彼らの言説が支配的な中国観となることはなく、彼らの世代は日露戦争までに第一線を退いていった。そして後に残ったのは、型にはまった単純な中国蔑視観という荒涼とした世界であった。

なお本論文は渡辺の三冊の本を読んで書いたもので、注を付していない。渡辺の著書の他に、仙台関係の人物については、今泉彪『仙台人物史』（1909年）と菊田定郷『仙台人物大辞典』（1923年）を参考にし、日清戦争時の仙台の様子は、仙台市役所編『仙台市史』（1909年）に拠った。また、日清戦争の経緯については、参謀本部編『明治二十七八年日清戦史』（全8巻、付図、1904年～1907年）を参考にしている。